

令和6年度 自己評価・学校関係者評価 報告書
岐阜県立岐阜希望が丘特別支援学校

学校番号	104
------	-----

自己評価

学校教育目標	「明るく 元気に 生き生きと」 ・児童生徒一人一人の実態に応じた「生きる力」を育み、自立と社会参加を目指す。
--------	---

【教務部】

評価する領域・分野	教務部 「教育活動・学習活動」
現状及びアンケートの結果分析等	・今年度から校務支援システムが導入され、学籍や出欠に関わる帳票類についてシステム上で運用が開始される。個別の指導計画、指導要録について、令和7年度から県内統一様式で運用を開始するが、当校では、今年度から個別の指導計画も校務支援システムを活用し、昨年度から作成の準備を進めてきた。 ・令和7年度から、中学校教科書が改訂される。 ・現在使用中の教科用一般図書が授業で活用できるか、また、学年の実態に合っているかなどについて、再確認や見直しが必要である。 ・令和6年度は小中学部ともに教育課程D1の対象となる児童生徒は在籍せず、令和7年度以降の運用についての方針を検討する必要がある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 校務支援システムを使った帳票類の作成や管理について調整をする。 2 中学校教科書や一般図書の選定、指導書、補助教材などに関わる見直しや手続きを計画的に進め、令和7年度に向けて指導環境を整える。 3 教育課程D1の対象となる児童生徒の実態や想定される指導内容、運用上の課題等について協議し、令和7年度以降の運用についての方針を決める。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 教務部を中心としたシステム管理と操作や作成に関する調整案内、及び、各分掌長と各帳票の作成管理者間の連携。 2 学習グループや部会での課題集約や問題提起。教務部内の情報共有と業務スケジュール調整、教科書選定委員会や補助教材検討委員会での審議。 3 学習グループや部会の意見集約、教育課程検討委員会や主事会、教務部会での情報共有や協議。
目標の達成に必要な具体的取組	1 ・諸計画作成や成績及び出欠管理が滞りなく開始できるよう初期設定を行う。 ・運用上課題になることや全校で統一したい事柄について取りまとめ、次年度の全面導入に向けた準備を整える。 ・個別の指導計画の様式や運用の仕方に関する課題や不明点について、特別支援教育課や他校からの情報を得ながら明らかにし、令和7年度分作成を計画的に進める。 2 ・教科書選定委員会までに、部やグループでの検討、教科書閲覧に係る依頼やスケジュール調整、選定資料作成等を公正且つ計画的に進める。 3 ・令和7年度教育課程についての方向性が定まるよう現状課題や部の意見を集約し、校内委員会での情報共有や協議が円滑に進むよう調整をする。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 校務支援システムによる個別の指導計画作成や出欠管理が滞りなくできるよう案内できたか。 2 教科書や補助教材等に係る手続きや業務を進め、令和7年度の指導環境を整えることができたか。 3 各部において、教育課程に関する現状の課題を協議し、次年度に向けた方向性を検討し、明確にできたか。

取組状況・実践内容等	・校務支援システムによる出席簿の作成が県内特別支援学校で開始された。システム不具合には速やかに解決できるようにした。 ・校務支援システムによる個別の指導計画作成については、県の運用開始より先行して実施した。各担任がスムーズに操作できるように、作成方法についてのマニュアルを作成した。 ・中学校教科書の採択替えに伴い、教科用図書の見直しを行った。 ・教育課程D1の対象となる児童生徒の実態や想定される指導内容、運用上の課題等について、学習グループや部会で意見を集約し、教育課程検討委員会等で検討して、D1とD2を統合して「教育課程D」とした。
評価の視点	評価
1 校務支援システムの操作方法について各担任に分かりやすく説明し、不具合について迅速に解決できるように、委託業者、県担当者等と連携して進めたか。	A ☒ B C D
2 令和7年度の学習指導（活動）に必要な教科書、補助教材、指導書等に係る業務を進め、指導環境を整備することができたか。	A ☒ B C D
3 令和7年度教育課程編成に向けた部ごとの見直しや課題の検討について呼び掛け、校内会議調整などを計画的に進めることができたか。	A ☒ B C D
成果・課題	総合評価
○校務支援システムの不具合には、委託業者や県担当者と連携し、迅速に解決できるようにした。 ○操作マニュアルの作成により、作成間違いを最小限に抑えることができた。 ○令和7年度から改訂される中学校教科書を中心に教科書選定を公正に進め、それに伴う補助教材や指導用教科書等の教育環境整備を計画的に進めた。 ▲校務支援システムによる個別の指導計画が、次年度から県内統一様式での運用開始となるため、今年度作成したマニュアルの修正が必要である。また、操作方法のみでなく合わせた指導については、教科を意識した指導計画であることを再度周知する必要がある。	A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 個別の指導計画を県内統一様式で作成することに伴い、目標の立て方や評価方法など、新たな説明資料（留意事項等）について検討し、作成する。 2 学習グループや部会の意見集約、教育課程検討委員会や主事会、教務部会での情報共有や協議により、教科等を合わせた指導に含まれる教科について見直す。 3 高等学校教科書改訂に伴う新規採択、また、一般図書や指導書、補助教材などに関わる見直しや手続きを計画的に進める。 4 令和8年度実施に向けて、高等部A類型、B類型の単位数、単位取得学年等について教育課程検討委員会等で協議し見直す。

学校関係者評価 （令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等
・校務支援システムについては、システムエラー等もあって、今は業務の負担軽減になっていないかもしれないが、そういったシステム整備には大変お金が掛かっていることを認識して、有効活用してほしい。 ・高等学校教科書改訂に伴う新規採択について、より活用しやすい図書の選定をしてほしい。

【情報教育部】

評価する領域・分野	情報教育部 「情報教育」「学習支援」「情報機器管理」	
現状及びアンケートの結果分析等	・児童生徒のＩＣＴ環境の対応について、教育委員会と密に連絡を取り合う業務が多くある。（１人１台端末等の情報機器の管理及び運用） ・校務を円滑に運用するためのＩＣＴ環境を整える。（Teams、文書共有フォルダ） ・保護者や地域に対する情報発信を継続して行う必要がある。（学校ホームページ運用）	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 情報教育、視聴覚教育の環境を充実させるとともに、タブレット端末やプロジェクター等の教育機器を活用した授業に向けて職員に情報発信を行う。 2 学校間総合ネットやTeams等の活用を促進し、情報の共有化と作業の効率化を図る。また、ホームページ等を通じて学校教育についての理解啓発に努める。	
重点目標を達成するための校内組織体制	1 情報教育部のＩＣＴ推進担当、情報管理担当、タブレット端末管理担当 2 情報教育研修会、コア・ティーチャーによる研修会、情報セキュリティ委員会	
目標の達成に必要な具体的取組	1 機器の整備と利活用 ・ＩＣＴ機器についての情報を発信したり、情報教育部内での研修を充実したりすることで、職員のスキルアップを図る。 ・タブレット端末や視聴覚機器を定期的に点検及び整備することで、情報教育、視聴覚教育の環境を充実させる。 2 情報の共有と発信 ・校内のネットワークを活用し、情報の共有化と作業の効率化を図る。 ・ＩＣＴ機器や個人情報の取り扱いについては、定期的に職員全員に注意喚起をする。 ・ホームページをWordPressへ移行して閲覧しやすいものとし、また、閲覧する側のニーズに応えられるよう定期的にホームページを更新する。	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた教育環境を整備し、ＩＣＴ機器の利活用を推進することができたか。 2 誰もが活用しやすい環境を整え、情報機器や教材の共有化の推進を図ることができたか。	
取組状況・実践内容等	1 情報機器の活用について専門性の向上につながる研修を個別に実施した。 ・タブレット端末や、視聴覚機器の点検や設定の見直し等を行うことで、機器等を使いやすい環境に整備することができた。 2 定期的に情報機器の管理や整備を行った。 ・情報機器や個人情報の取り扱いについて、定期的な注意喚起を継続して行った。 ・ホームページをWordPressへ移行し、定期的にホームページを更新することができた。	
評価の視点		評価
1 一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた教育環境を整備し、ＩＣＴ機器の利活用を推進することができたか。		A ☒ B C D
2 誰もが活用しやすい環境を整え、情報機器や教材の共有化の推進を図ることができたか。		A ☒ B C D
成果・課題		総合評価
○定期的に情報機器の管理や整備を行ったことにより、大きなトラブルがなく運用することができた。 ○教育財務課（情報基盤係）やヘルプデスクと密に連絡をとり、機器の管理や接続申請等をスムーズに行うことができた。 ○ホームページのWordPress移行作業を完了し、更新業務の軽減に取り組むことができた。また、定期的な更新により、学校教育の広報を担うことができた。		

○パソコン室や商業関係室にある動作不良のデスクトップパソコンを整理し、使いやすい部屋の環境に整えることができた。 ○情報セキュリティチェックや Teams を通じて職員に情報セキュリティに関する注意喚起を行うことができた。 ▲動作不良の情報機器や視聴覚機器や、バッテリー膨張による不具合のある機器が多数ある。計画的に修繕依頼や、廃棄を検討する。 ○電子黒板や学習支援ソフト「MetaMoJi」の活用促進、iPad アプリの活用や設定について個別に研修を進めることができた。 ▲情報機器の活用研修については、情報機器の活用コア・ティーチャーと研修内容が重なるため職員全体には実施しなかった。 ○情報機器の取り扱いや著作権についての注意喚起について Teams を利用して定期的に行うことができた。	A B C D
来年度に向けての改善方策案	1 情報機器の運用（校務系）について、情報管理担当者は教務部が連携して取り組む。 2 情報機器の活用（学習系）の研修（情報モラル含む）について、ICT推進担当は情報機器の活用コア・ティーチャーと学習支援部と連携して取り組む。 3 情報機器の管理や個人情報の取り扱い、著作権について、情報セキュリティ取扱い管理者（教頭）と連携して取り組み、定期的に注意喚起と研修を行う。

学校関係者評価 （令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等 ・ホームページについて、WordPress へ移行したことで、修正や変更が簡易になり、更新への負担が減ったことはよかった。ホームページが見やすく、活用しやすいものになるとよい。 ・紙ベースがシステム化されると慣れるまで大変である。ICT機器について、教員が授業や教材教具づくりに活かせるように研修することは大切である。

【学習支援部】

評価する領域・分野	学習支援部 「研修」 「授業力向上」 「学習支援」
現状及びアンケートの結果分析等	1 各分掌やコア・ティーチャーが研修計画に沿って実施し、肢体不自由教育を行う教師としての基礎知識の定着や専門性の向上など経験年数に応じた効果的な研修を行っている。 2 授業公開（授業記録も含む）をもとにしたグループ内及び他グループとの学び合いを通して、様々な捉え方や考え方を知り、気付きや学びをもとに自分なりに試行錯誤し、グループ内で学び合うことで全教職員で根拠のある授業を築きあげることにつながるよう推進している。 3 外部専門家による授業支援、センターリハビリ参観、コア巡回において、複数から助言を得る機会があり、授業支援後、担任が助言内容や改善策をまとめ、個に応じたよりきめ細やかな指導を行うために、より活用し共有しやすい方法について検討する必要がある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 教職員が「やりたい」「学びたい」と主体的に参加できる研修を計画・実施する。 2 児童生徒理解の見方や考え方を深め、「授業づくりの日」における学び合いの仕方を提示し、児童生徒一人一人の実態や障がいに応じた根拠ある授業づくりや授業改善を推進する。 3 担任が外部専門家の助言を指導に活かすために、学級担任が助言をどのように理解し選択し、授業の中に取り込んでいくのかを考えられるようにする。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 校内研修計画 各分掌やコア・ティーチャーとの連携 2 授業力向上委員会 授業づくりの日 3 外部専門家やセンター療法士、コア・ティーチャーとの連携
目標の達成に必要な具体的取組	1 各分掌やコア・ティーチャーと連携を図りながら、研修方法の工夫をするなど、限られた時間内で、効果的な学び合いができる研修会を計画・実施する。 2 各学習グループの授業（授業記録を含む）を参観（視聴）し、児童生徒の学ぶ姿を通して、各部で児童生徒理解の見方や考え方を共有し深め合う場を設定し、根拠ある授業を主体的に築きあげていくことを目指す。 3 「記録・相談票」の活用方法について具体的に提示することで、担任が様々な専門家等の助言を整理し、児童生徒の実態把握や授業内容の改善策の検討に役立てることができるようになる。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 肢体不自由教育を行う教師としての基礎知識の定着、専門性の向上に効果的な研修の体制を整えることができたか。 2 児童生徒の願う姿を明らかにし、各部各重点を意識して授業づくりをするなど、それぞれが実践していることを交流する時間を設定することで、コミュニケーションを増やす。更に、児童生徒の学ぶ姿を通して、児童生徒理解の見方や考え方を深め合う雰囲気となるような「授業づくりの日」を設定することができたか。 3 外部専門家からの専門的な助言により、担任が個別課題や授業目標等を解決する上で大切な児童生徒の姿勢や身体の動き等について「記録・相談表」をもとに見直しをし、具体的な手だてや教材・教具の開発の工夫等、授業内容を改善することにつながることができたか。

取組状況・実践内容等	1 全教職員の専門性の向上を目指し、各種専門家等及び校内の人材（各分掌、各コア等）を生かし、計画的に研修会を実施している。 2 PDCAサイクルに基づく授業改善を基本とする「授業づくりの日」を月1回設定し、学び合いを大切にする雰囲気のもと、教育目標や各部重点を意識し、学習グループの授業公開や授業記録等を通して、職員間で学び合いながら、児童生徒理解や授業づくり及び授業改善を行っている。 3 年間を通しての外部専門家による授業支援や必要に応じて、センターのリハビリ参観を実施している。
評価の視点	評価
1 肢体不自由教育を行う学校の教職員としての基礎知識の定着、専門性の向上に効果的な研修の体制を整えることができたか。	A ☒ B C D
2 児童生徒理解や授業改善等について、授業公開や授業記録等をもとに各学習グループや各部で学び合うことで、児童生徒への支援をより充実させていき、根拠ある授業を主体的に築きあげることを推進することができたか。	A ☒ B C D
3 専門家等との連携が授業内容の改善等につなげることができたか。	A ☒ B C D
成果・課題	総合評価
1 ○医師による授業参観や勉強会を通して、医師の立場から児童生徒理解の見方や考え方について直接相談できたり、子ども達の成長につながる教職員の役割等について学んだりできる肢体不自由教育研修会「重度心身障がい児の理解」を実施できた。 ○各分掌やコア・ティーチャーが研修計画にそって実施し、肢体不自由教育を行う学校の教師としての基礎知識の定着や専門性の向上など経験年数に応じた効果的な研修を実施できた。 2 ○学習支援部（各学習グループ担当）がまとめ役となり、授業公開（授業記録も含む）をもとにした学び合いを行い、様々な捉え方や考え方を知ることができた。また、自分なりに試行錯誤したことを、互いに発信し合うことで、全教職員で根拠のある授業を築いていくことにつながるよう推進した。 ▲コア・スクール研修や肢体不自由教育研修等で得た基礎知識や専門性の向上をもとに、全教職員がより連携・共同することで、より根拠のある教育活動を展開できる「授業づくりの日」の工夫及び実践的な取組について再考する必要がある。 3 ○困っていることやニーズに応じて必要な支援や指導助言を受けられるよう、外部専門家との連絡調整を図り、教職員の学びや研修の場を計画的に設けることができた。 ▲研修や助言を受ける機会が複数回に渡っており、教職員が主体的に授業支援を受けられるよう、研修内容や体制を見直す必要がある。	A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 ・肢体不自由教育を行う学校の教職員としての専門性の向上、定着を一人一人が意識して実践が行えるよう、各分掌やコア・ティーチャー等と連携を図りながら、研修会を計画・実施する。 ・引き続き研修会及び研修内容を精選し、教職員が「やりたい」「学びたい」と主体的に参加できる研修の工夫をする。 2 ・「授業づくりの日」について全校共通の視点を設定することで、指導の重点である「根拠のある授業づくり」について、より実践的な取組が自主的にできるよう学び合いや授業改善を推進する。 3 ・教職員が主体的に授業支援を受けられるよう研修内容や体制を見直す。

学校関係者評価 （令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等
・専門性の向上を目指して、忙しい中、教員が様々な研修を積み重ねており、それが保護者の安心へとつながっている。とても素晴らしいことだと思う。 ・研修内容を精選したり、体制を見直したりして、教員の負担を軽減して研修に取り組めるとよい。

【保健安全部】

評価する領域・分野	保健安全部 「保健管理」「安全管理」 ～安全・安心な学校づくり～
現状及びアンケートの結果分析等	・児童生徒の健康状態の変化を早めに把握したり、長期入院や困難な事例に適切に対応したりすることができる健康管理に努める。 ・全校児童生徒の健康管理のため、保護者やセンターとの連携を密に行う必要がある。 ・医療的ケア児の校外学習（福祉友愛プール・宿泊学習を含む）を安全に実施できる、きめ細やかな計画を立てる。 ・児童生徒が安心して学校生活を送るため、衛生的な校内環境を維持し続ける。 ・ヒヤリハット事例を提出しやすい環境を整える。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 医療的ケア児の校内での学習活動や、校外学習及び宿泊学習の計画立案において、担任と看護師が十分に連携を取る。 2 職員自身の衛生意識の維持及び衛生的な校内環境の維持を呼び掛ける。 3 ヒヤリハット事例の提出を定期的に呼び掛ける。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 保護者やセンターとの引継ぎによる健康状態の把握と情報交換、養護教諭・教員・看護師による健康状態の把握と情報共有、緊急対応研修会・訓練、医療的ケア検討委員会、医療的ケア連絡会、指導医巡回指導、ケース会議、主治医訪問、実施検討会 2 使用した教室やトイレの清掃（毎日）、職員作業（月1回）の計画、時期に応じた感染症対策の発信 3 ヒヤリハット事例提出の呼び掛け（月1回）、ヒヤリハット事例強化週間の実施
目標の達成に必要な具体的な取組	1 養護教諭の教室巡回や健康観察表を活用し、児童生徒の健康状態を把握し、体調の変化に早めに対応できるようにする。 緊急対応研修会や実技指導研修会等を実施し、医療的ケア対象児童生徒の健康状態や医療的ケア内容について教職員が理解できるようにする。 健康状態に課題が生じた場合に、主治医や学校医、指導医に相談して対応する。 校外学習の計画段階から看護師が加わり、安心安全な実施につなげる。実施検討会で指導医を交えて十分に検討を行う。 2 効果的な清掃方法を職員に提示し、衛生的な環境の維持を呼び掛ける。職員作業では、普段掃除が行き届かない場所を中心に計画的に分担する。 清掃活動に必要な道具や物品等の点検及び補充を行う。 3 ヒヤリハット事例提出の呼び掛け（月1回）やヒヤリハット事例強化週間を実施する。 報告されたヒヤリハット事例は速やかに職員に周知し、同様の事例の防止を促す。 ヒヤリハット事例に気が付いたときにすぐに記入できるように、各教室等に報告用紙を配置する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 医療的ケア児の校内での学習活動や、校外学習の計画立案において、担任と看護師が十分に連携をとり、安全に実施されたか。 2 校内が衛生的に維持されたか。 3 ヒヤリハット事例が適切に提出されたか。

取組状況・実践内容等	1 提出された医ケア児該当クラスの週予定をもとに、医療的ケアが必要な場面やタイミングについて担任と看護師が事前に打ち合わせ、当日の医療的ケアを実施した。 坐薬挿入の研修と同時にプログラム練習キットを用いて使用の留意点を周知した。 校外学習における必要書類の記入方法や提出時期を事前に担任に説明した。Teams や口頭で期日までの提出を促し、安心安全な校外学習や宿泊学習が実施可能かを実施検討会で検討した。 2 職員作業実施日を毎月中旬に設定し、計画的に校内全体の清掃を行った。清掃道具の消耗や破損については、できるだけ速やかに補充し、清掃活動に支障が出ないようにした。 3 各教室に報告用紙を配置し、Teams で毎月初めにヒヤリハット事例の提出を呼び掛けた。 10月にヒヤリハット報告強化週間を設け、多くの報告をもとに全職員に事例共有を行った。
評価の視点	評価
1 綿密な健康観察と的確な医療的ケアの実施ができたか。 2 校内を衛生的に維持し、児童生徒の学習環境を整えることができたか。 3 ヒヤリハット事例の提出を定期的に呼び掛け、事例共有をすることで、全職員が危機意識をもつことができたか。	A ☒ B C D A ☒ B C D A ☒ B C D
成果・課題	総合評価
1〇事前に学級での活動内容を知ること、授業や学校行事に向けて計画的に看護師の配置をすることができた。来年度も週予定の提出を依頼する。 〇校外学習では、事前の打ち合わせを密に行い、校外でも安全に医療的ケアを行うことができた。来年度は外部看護師が同行する可能性があるため、教員と看護師との打ち合わせを丁寧に行いたい。また、蓄積データを効率的に利用した書類の作成方法や作成スケジュールを提案し、担任の負担軽減を図りたい。 2〇毎日の各教室の清掃や毎月の職員作業を通して校内の様々な場所の清掃を行い、衛生状態を維持することができた。 3〇年度初めに「安全な学校生活にしよう！！（事例への対応策をまとめたもの）」を各教室に配付し、危険な場面や状態に対する注意喚起を行った。 ▲ヒヤリハット報告強化週間では、多くの報告が集まったが、年間を通しての報告件数は少なめだった。ヒヤリハットに気付き、報告しやすい環境の工夫をする必要がある。	A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 医療的ケア児の校内での学習活動や、校外学習及び宿泊学習の計画立案において、担任と看護師が十分に連携を取る。 2 職員自身の衛生意識の維持及び衛生的な校内環境の維持を呼び掛ける。 3 定期的にヒヤリハット事例報告の提出を呼び掛ける。

学校関係者評価（令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等
・医療的ケア児の泊を伴う活動に保護者が付き添わずにすむのは、保護者にとって大変ありがたいが、看護師不足が心配である。 ・医療的ケア児の通学支援についても要望が上がっているが、スクールバスへの看護師の添乗はすぐには難しいか。

【防災・環境部】

評価する領域・分野	防災・環境部 「防災・防犯等非常時への対応」 「校内安全」	
現状及びアンケートの結果分析等	・児童生徒在学中の地震、不審者侵入時の対応の明確化。 ・随時、危機管理体制の見直し検討。 ・災害時の希望が丘子ども医療福祉センター、友愛アリーナとの連携	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 地震時に学校待機になった場合の必要物品や体制の整備。 2 不審者侵入時の訓練を行い、児童生徒、職員の安全の確保について検討。 3 災害時に隣接する施設との連携体制の強化。	
重点目標を達成するための校内組織体制	1 防災対策委員会、防災職員研修、命を守る訓練（火災、水害、引き渡し） 2 防災対策委員会、防犯研修 3 防災対策委員会、総合防災訓練	
目標の達成に必要な具体的な取組	1 震災を経験した学校から情報を集め、必要な物品や体制を整備する。 2 不審者侵入時の役割分担を明確にし、児童生徒、職員の安全を最優先に行動できるよう訓練を行い実践する。 3 各施設間での連携について協議し、当校の役割を明確にする。	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 災害時に学校に待機できる体制は整ったか。 2 全職員が不審者侵入時の対応が分かり、行動できるか。 3 災害時における当校の役割が明確になったか。	
取組状況・実践内容等	1 防災物品として毛布、ポータブル発電機を本年度新たに配備した。また、多目的室の整備に伴い、物品を一か所にまとめ、災害時にすぐに使用できるようにした。 2 生徒の在校中に不審者侵入を想定した訓練を行うことができた。訓練を通して、遅刻者や来校者に対して校内の危険を知らせる手段をどのようにするのかという課題があった。その対応として、緊急事態であることが分かるよう、玄関にパトランプを設置し点灯させるようにした。 3 希望が丘子ども医療福祉センターと友愛アリーナと災害時の対応について協議することができ、合同で訓練を行うことができた。訓練を通しての課題を共有した。	
評価の視点		評価
1 災害時に必要な物品や体制を整えることができたか。 2 不審者侵入時の対応について検討、改善できたか。 3 隣接する施設と連携、協議することができたか。		A ☒ B C D ☒ A B C D A ☒ B C D
成果・課題		総合評価
1 ○防災備品を管理、使用しやすくなった。 ▲能登半島地震やその他災害を受けた地域の対応を参考にして、備蓄品の整備を行う。 2 ○不審者侵入時の対応を訓練で確認することができ、警察署の指導も受けることができた。 ▲昼食中、休み時間でも対応できるよう、訓練のパターンを増やす。 3 ○火災時には、希望が丘子ども医療福祉センターの放送内容を聞いて行動する、水害時には、友愛アリーナへ避難と施設間での避難行動について確認することができた。 ▲火災時の対応について来年度4月に担当者同士で改めて確認し、共有する。		A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 児童生徒が昼食中を想定した不審者対応訓練を実施する。 2 災害時に備え、備品の整備や訓練、研修等を通じて児童生徒、職員と対応について共有する。	

学校関係者評価（令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等
・希望が丘子ども医療福祉センターでも防災や防犯訓練を実施している。ぜひ、連携を図っていきたい。学校での取り組みについても教えてほしい。 ・先日の切り付け事件（自傷）の際は、解決するまでとても怖かった。これからも、何が起こるか分からないが、地域で連携して情報共有しながら、協力して対応できるとよい。

【生活支援部】

評価する領域・分野	生活支援部 「人権教育推進（MS・MSＪリーダーズ）」 「希望フェスタ（児童会・生徒会活動）」「スクールバス運行」	
現状及びアンケートの結果分析等	・職員に対して、いじめの定義やSOSの受け取り方、教育相談やSCの活用等について周知徹底することが課題である。また、あいさつ運動における児童生徒の姿勢や態度を日常に汎化させていくかが課題である。 ・希望フェスタを全校児童生徒が一体となって盛り上げ、感染症予防対策をしながら、保護者だけでなく卒業生や地域に開かれた行事として開催することを検討する。 ・管理校として、スクールバスの安全安心な運行ができるように、新しく加わった盲学校も含めた関係機関との調整や保護者への連絡等を丁寧に行う。	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 職員・児童生徒の人権教育に関わる基礎的な知識や態度を高めるための研修や活動等を実施する。 2 全校児童生徒が一体となり、開かれた希望フェスタとなるような企画・運営を行う。 3 安全安心なスクールバス運行のため、管理校として関係機関との連絡調整や保護者への連絡・説明を丁寧に行う。	
重点目標を達成するための校内組織体制	1 人権感覚チェックリスト、人権研修会、生活についてのアンケート、あいさつ運動・あったかい言葉掛け運動、いじめ防止等対策検討会議 2 児童会・生徒会、希望フェスタ 3 乗務員研修、スクールバス担当者会、スクールバス保護者説明会	
目標の達成に必要な具体的取組	1 職員の人権教育に関わる基礎的な知識を高める研修や取組を行う。MS・MSＪリーダーズを中心として、日常で挨拶が活発になるよう意識しながら、あいさつ運動・あったかい言葉掛け運動を行う。 2 希望フェスタに向けて、計画的に児童会・生徒会活動を進める。土日連日開催、各部グループをランダムに配置したプログラムを編成する。卒業生や地域の人へ開放するための組織体制・運営を行う。 3 運行業務に関わる書類や確認事項について、長良特別支援学校や盲学校、バス会社等と密に連絡を取る。 スクールバス保護者説明会等でスクールバスの利用について説明する。	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 職員・児童生徒の人権教育に関わる基礎的な知識や態度を高めることができたか。 2 全校児童生徒が一体となって盛り上がる希望フェスタが開催できたか。安全に開かれた行事として希望フェスタを開催できたか。 3 関係機関や保護者と連携を図り、スクールバスの安全運行ができたか。	
取組状況・実践内容等	1 ・今年度から改編した「生活についてのアンケート」を実施した。 ・あったかい言葉掛け・あったかい態度運動の掲示物を、生徒の顔が見えるように工夫した。 2 ・希望フェスタでは、開催日程やプログラム編成を工夫した。また、当日に発表を鑑賞できる対象を学校評議員や卒業生まで広げた。 3 ・関係機関と密に連絡を取り、事故のないよう安全運行に努めた。 ・追加の利用希望や乗車変更希望に対して、その都度、関係機関と連絡・調整を図りながら、保護者にも丁寧に説明し、対応した。	
評価の視点		評価
1 人権教育推進計画に基づいて、職員・児童生徒の人権教育に関わる基礎的な知識や態度を高めるための研修や活動等を実施できたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
2 全校児童生徒が一体となり、開かれた希望フェスタを企画・運営ができたか。		☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
3 安全・安心なスクールバス運行のため、管理校として関係機関との連絡調整や保護者への丁寧な連絡・説明をできたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐

成果・課題	総合評価
1○人権に関わるアンケート結果を基に、いじめの定義や対応について資料を作成し、職員会で周知した。 ○「生活についてのアンケート」結果を基に、支援が必要な児童生徒を早期に発見し、担任やスクールカウンセラーと連携して支援できた。 ▲職員の人権意識を高める、当校の実態に即した研修を行う。 ▲あいさつ運動について年間を通して定期的実施できるとよい。また、あったかい言葉掛け・あったかい態度運動は、教職員や保護者も巻き込んで学校全体で実施できるとよい。 2○開催日やプログラム編成を工夫したことで、学校全体が一体となって希望フェスタを盛り上げることができた。 ○昨年度よりも多くの関係者に児童生徒の発表を鑑賞してもらうことができた。 ▲希望フェスタは、今年度の企画（プログラム編成など）を継続しつつも、児童生徒の体調管理、当日の職員配置、観客数などを考慮した上で、一人一人が本番でより力を発揮できる企画を計画・実施する。 3○管理校として、関係機関と密に連絡を取り、安全なスクールバス運行ができた。また、保護者の要望にも迅速かつ丁寧に対応できた。 ▲他校や保護者、担任との連絡・調整、運行に必要なデータの入力・管理をより効率的にできるような工夫が必要である。	A B C D
来年度に向けての改善方策案	1 職員の人権についての知識や態度を高めるために、当校の実態に即した研修会を行う。また、あいさつ運動を年間を通して定期的実施し、あったかい言葉掛け・あったかい態度運動を職員も含めた学校全体で取り組めるよう工夫する。 2 今年度の企画を継続・発展させ、児童生徒一人一人が本番でより力を発揮できる企画・運営を行う。 3 安全・安心な運行のために、関係機関や保護者と確実かつ効率的な連絡・調整を行う。また、再来年度に向けて「管理校」引継の準備を行う。

学校関係者評価 （令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等 ・福祉友愛プールの利用時、児童生徒がきちんと挨拶をしていて、とても好感がもてた。学校での指導が生きていると感じた。 ・希望フェスタでは、素敵な作業製品を購入できてよかった。少しずつ、地域に開いていけるとよい。
--

【総合支援部】

評価する領域・分野	総合支援部 「校内支援」「センター的機能の充実事業」「キャリア教育」
現状及びアンケートの結果分析等	・本人・保護者、担任のニーズや支援方法を明確にし、担当者から担任等へ積極的に働き掛ける必要がある。 ・『個別の教育支援計画』県統一様式への移行に伴い、当校として必要な情報の整理や記載方法等について検討する。 ・肢体に障がいをもつ園児、児童生徒の在籍状況を把握し、センター的機能や相談窓口について周知し、必要に応じて支援につなげる。 ・職員・保護者のキャリア教育についての理解が十分できていないため、職員のキャリア教育への理解を深める取組が必要である。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 ニーズを明確にし、支援が充実する支援体制の構築 2 『個別の教育支援計画』県統一様式への移行と活用 3 センター的機能についての理解・啓発活動と関係諸機関との連携 4 キャリア教育についての理解・啓発活動
重点目標を達成するための校内組織体制	1 分掌会、支援委員会 2 校内コーディネーター、担任 3 当校のコア・ティーチャー、岐阜市教育支援委員、各教育事務所・学校・施設、外部研修会や会議等 4 総合支援部メンバー、職員、保護者
目標の達成に必要な具体的取組	1 校内コーディネーターが中心となり、本人・保護者、担任のニーズを把握し、具体的な支援につながるよう、支援委員会等で情報共有や支援方法等を検討する。 2 『個別の教育支援計画』県統一様式への移行に伴い、当校として必要な情報の整理や記載方法等について検討し、活用できるようにする。 3 会議や関係機関を通じて、肢体に障がいをもつ児童生徒が在籍する園・学校にリーフレットや研修の案内等を配付し、当校のセンター的機能や相談窓口についての理解・啓発を図る。 4 研修等を通じて、職員のキャリア教育への理解を深める。 「キャリア教育だより」発行を含め、情報発信の時期や方法を工夫することで、保護者・職員のキャリア教育についての理解・啓発を図る。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 本人・保護者、担任のニーズを把握し、必要に応じて支援につなげることができたか。 2 『個別の教育支援計画』県統一様式への移行に伴い、当校として必要な情報の整理や記載方法等について検討し、活用できたか。 3 リーフレットや研修の案内等の配付により、関係機関に対して当校のセンター的機能や相談窓口について啓発を図ることができたか。 4 研修の場を設けたり、「キャリア教育だより」発行等したりすることで、職員・保護者のキャリア教育への理解を深めることができたか。
取組状況・実践内容等	1 本人・保護者からのニーズを把握し、分掌会で支援方法を検討した。 支援委員会やケース会議を開き、情報共有や支援方法等について検討・確認した。 2 『個別の教育支援計画』に記載する情報の整理・記入の仕方、運用方法等のマニュアルを作成した。 3 県教育委員会を通じて各関係機関にリーフレットを配付し、岐阜市主催の会議等でセンター的機能について紹介した。 幼稚園、教育委員会、小学校から依頼があり、相談支援を行った。 4 年6回発行している「キャリア教育だより」を回覧し、Teams や部会等でキャリア教育を通して育むべき能力等について説明した。

評価の視点		評価
1 本人・保護者、担任のニーズを把握し、必要に応じて支援につなげることができたか。		A ☒ B C D
2 『個別の教育支援計画』 県統一様式へのスムーズな移行と活用ができたか。		☒ A B C D
3 リーフレット等の配付により、当校のセンター的機能や相談窓口についての理解・啓発を図ったり、関係諸機関と連携したりすることができたか。		A ☒ B C D
4 研修等を通じて、職員のキャリア教育への理解を深めることができたか。		A ☒ B C D
成果・課題		総合評価
1 ○校内の支援体制について、少しずつ職員に周知されつつある。その結果、各コーディネーターに、担任や管理職等から、本人・保護者の困っていることやニーズについて情報提供がなされ、支援につなぐことができた。 2 ○『個別の教育支援計画』の県統一様式への移行に伴い、作成方法、記入内容等のマニュアルを示したことで、円滑に移行することができた。 3 ○当校のホームページやリーフレットを見た関係機関から、肢体不自由のある幼児児童生徒の支援方法について相談があり、支援につなげることができた。 ▲肢体不自由のある児童生徒が地元の小・中学校に通うケースが増えた。肢体不自由のある児童生徒が在籍する学校と定期的に電話等で連絡を取り、支援につなげる。 4 ○キャリア教育の視点を意識して、児童生徒の目標を設定したり、保護者に子どもの数年先の姿を意識するよう働き掛けたりする職員が増えつつある。 ▲卒業後を見据えた系統的な指導を行うために、職員のキャリア教育についての理解が深まる研修等を行う必要がある。		A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 ニーズを明確にし、支援が充実するような支援体制を構築する。 2 センター的機能についての理解・啓発を図るとともに、関係諸機関と連携する。 3 キャリア教育についての理解・啓発活動を行う。	

学校関係者評価 （令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等
・キャリア実習報告会では、年金の仕組みや手続きについての講話も併せて聞くことができ勉強になった。 ・実習を通して、我が子の成長を感じることができた。とても感謝している。 ・「個別の教育支援計画」が障がい者年金の申請時にとても役に立った。

【渉外・広報部】

評価する領域・分野	渉外・広報部 「保護者、地域との連携」「文化活動の推進」
現状及びアンケートの結果分析等	・コロナ後のPTA活動の構築段階として、組織や活動内容を見直す必要がある。 ・校外作品展への参加の呼び掛け、校内作品展を計画的に実施する。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 保護者がPTA活動を主体的に進めていけるよう支援し、活動についての情報発信と共有を図る。特に保護者間の交流をねらう。 2 積極的な校外作品展への参加を呼び掛けて、校内作品展の充実を図り、情報発信をする。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 執行部や各委員会を支援する渉外・広報部職員間の情報共有と協力体制。また、PTA行事や会議を進める上で必要な管理職や他職員との連携。 2 渉外・広報部担当職員と学級担任との情報共有と協力体制。
目標の達成に必要な具体的取組	1 PTA活動に関する会議や相談、準備などを保護者と連携して進め、主に文書作成や連絡調整の面で支援する。 2 校外作品展の参加について計画的に校内に伝える。また、校内作品展の内容や計画を早期に提案し、授業で取り組む体制を支援する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 保護者がPTA活動を主体的に進めていけるよう支援し、情報発信できたか。 2 校外作品展の参加や校内作品展を計画的実施ができ、情報発信できたか。
取組状況・実践内容等	・執行部役員・各委員会の長と連携し、PTA年間行事・活動を計画・実施することができた。 ・児童生徒数の減少と保護者の負担軽減のため、役員組織の見直しを行った。 ・校外・校内の作品展に計画的に実施できた。校外の「第4回あーと展覧会」では、個人受賞と学校として最多応募賞を受賞した。
評価の視点	
1 保護者がPTA活動を主体的に進めていけるよう支援できたか。	☐ A ☐ B ☐ C ☐ D
2 校外の作品展に出展する機会を設け、児童生徒の作品を情報発信できたか。	☐ A ☐ B ☐ C ☐ D
成果・課題	
1 ○PTA執行部との連絡は部長が行い、各委員会活動は担当者を介在して活動を実施した。 ○コロナ禍でのPTA活動の縮小により、活動の引継ぎや計画・実施が困難な状況があったが、今の状況にあった形で活動することができた。 ○PTA執行委員の計画で救命講習会を実施した。小学部を中心に多くの保護者が参加して学ぶことができた。 ○PTA活動の軽減と予算削減として広報「ふれあい」の発行を年1回とした。 ○各委員会の構成メンバーをPTA総会でお知らせしたことで、年度初めの委員会活動がスムーズに行うことができた。 ▲「施設見学」は、2年間に1回実施することとし、予算を立てる。 ▲「OB・OG保護者と語る会」の名称を「座談会」に変更する。 ▲PTAの入会が希望制になることを想定し、活動を検討する。また、予算案の検討を行う。 2 ○文化活動を全員で分担し行うことで、業務の効率化を図った。 ○校外の新規の作品展に計画的に出展することができた。 ▲作品展の出展がネット化され、入力作業が煩雑で困難になってきている。今年度同様に担当者の負担軽減を図り、分掌内での分担し計画的に作品データを集める。	☐ A ☐ B ☐ C ☐ D
来年度に向けての改善方策案	1 PTA入会が希望制になることを想定し、今後のPTA活動を検討し支援する。 2 作品展の出展、搬入、搬出等の負担の軽減を図る。

学校関係者評価 (令和7年2月3日実施)

意見・要望・評価等
・自分の子どもが在学中、PTA活動は、保護者同士のつながりが深くなり、学ぶことも多く、とても楽しかった。PTA入会が希望性となっても、意義や必要性を感じて入会してもらえるとよい。 ・作品展に出品したり、賞をもらったりすることは、子どもにとって喜びであり、励みとなっている。 ・作品について、Dono(清流園)を利用して展示してもらってよい。作品をより多くの人に見てもらえるよい機会になるのではないかな。

【小学部】

評価する領域・分野	「小学部」	
現状及びアンケートの結果分析等	・教科担任制による教科学習で、専門性を活かした授業ができ、児童の学習に向かう姿勢や気持ちの切り替えにつながった。引き続き教科担任制を取り入れ、教科等授業の充実を図る。また、児童の実態に合わせた学習の工夫を行う。 ・経年研修で作成した指導案で、実際に授業を見合うことはできたが、全学級で設定するまでには至らなかった。授業交流できる時間を設定し、活動グループからの発信を踏まえて授業づくりの日ができるようにする。 ・保護者と日々の引継ぎを丁寧に行い連携を図ってきたが、目標や授業内容については、保護者の思いとずれが生じたところがあった。そのため、一緒に児童の育ちを支えられるよう、定期的に目標を相談、共有し、手だて等を確認する必要がある。 ・部内で情報を共有し、協力して運営することで、児童の安全・安心につなげることができた。引き続き部内の連絡、協力、対応体制を整え、あたたかい言葉を掛け合いながら、風通しのよい部運営ができるようにする。	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 一人一人の状況や見通しに合わせ適切に学べる教育課程づくり 2 児童の目標や6年間の積み重ねを大切にする授業づくり 3 目標を明確にした、保護者や関係者との相談、連携、引継ぎ	
重点目標を達成するための校内組織体制	1 学年会、類型、チーフ会、部会等 2 学年会、活動グループ、部会等 3 保護者、担任、部主事等	
目標の達成に必要な具体的取組	1 児童の状況や変化について把握し情報共有する。 ・教育課程と授業内容を確認し、改善するものはチーフ会を通して情報交流し提案する。 2 児童の目標を具体的にし、手立てや評価を丁寧に検討する。 ・单元ごとの担当者を決め、内容の確認や記録を検証し、6年間の見通しがもてる年間指導計画や教科書選定を行う。 ・部会でのミニ研修を定期的に行い、授業づくりの日を中心に研修できる環境を作り実践につなげる。 3 個別懇談で目標を確認し、日頃から確認したり修正したりしながら、関係者や外部専門家等とも連携をとり、児童の育ちを支えられるようにする。 ・保護者との連絡帳や学級通信、部だより、外部専門家の参観や支援を通して、目標や手だて、児童の具体的な学びの姿を伝える。	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 一人一人の状況や見通しに合わせ適切に学べる教育課程づくりができたか。 2 児童の目標や6年間の積み重ねを大切にする授業づくりができたか。 3 目標を明確にした、保護者や関係者との相談、連携、引継ぎができたか。	
取組状況・実践内容等	1 児童とのかかわりや観察を通して実態把握を図り、現在の教育課程について、学習グループ、チーフ会、部会を通じて検討した。 2 年間指導計画をもとに授業づくりの日で、児童の様子や授業内容を定期的に検討し、動画等で実践交流をして児童の目標や手だて、評価を検討した。 3 個別の指導計画で保護者と児童の願う姿を確認し、保護者との引継時や連絡帳、学級通信や教室前廊下の掲示を通して、目標と学習の様子を伝えた。 ・コア・ティーチャーや外部専門家を活用し、支援方法や学習環境について多角面から検討し実践につなげた。	
評価の視点		評 価
1 一人一人の状況や見通しに合わせ適切に学べる教育課程づくりができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
2 児童の目標や6年間の積み重ねを大切にする授業づくりができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
3 目標を明確にした、保護者や関係者との相談、連携、引継ぎができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐

成果・課題	総合評価
1 ○児童とのかかわりや観察を通して、実態把握を図り理解を深めたりすることで、一人一人の状況や見通しに応じた学びが適切かを再確認できた。 ○現在の教育課程が適切かどうか、学習グループ、チーフ会、部会で検討し、教育課程D1とD2をDにまとめることで、より個別に対応できるよう改善した。 ○今年度から教育課程D2からCに変更した児童は、より実態に合った学習内容で取り組めたことで、文字やかずの理解が高まり、日常生活の中で活用する姿が見られた。 2 ○教育課程Aでは、学習指導要領や指導書の目標に基づいた授業づくりができた。 ○部会でミニ研修を行い、教育課程C、Dの児童の実態から、学習指導要領小学部音楽科の段階の目標や手だて、3観点の学習評価ができるか検討ができた。 ○児童の実態に合わせた目標や課題設定をし、グループ間で共有しながら実践した。児童の変容につながった手だて、支援方法、環境づくりを評価し、次の学習への改善を図ることができた。 ○フリーの職員を学年ごとに配置したことで、日頃の様子や活動の目的や内容を共有したり、必要に応じて助言したりして、よりよい授業づくりができた。 ▲ミニ研修では話し合う内容は明確だったが、時間が不十分だった。授業づくりの日の中で、事例検討ができるとよかった。 ▲6年間を見通した年間指導計画や、個々の実態に合った教科書選定が難しかった。 3 ○コア・ティーチャーや外部専門家、希望が丘こども医療福祉センターのリハビリと連携できたことで、児童の具体的な指導に生かすことができた。 ○写真や動画を活用しながら、定期的に学習の様子を保護者に紹介したことで、児童の成長した姿を共有ができ、目標や手だてを再確認したり、困難な課題に対しては、関係者と連携したりして課題解決につなげることができた。 ▲連携する関係機関が多い児童の情報整理が難しかった。	A B C D
来年度に向けての改善方策案	- 希望が丘こども医療福祉センターで手術、リハビリ、家庭の事情のために年度途中に入所し、当校へ転入する児童が在籍している。 令和6年度…4年生1名、5年生2名、6年生2名 計5名 令和5年度…2年生1名、4年生2名、5年生2名 計5名 令和4年度…1年生1名、2年生2名、3年生1名、6年生2名 計6名 上記の半数以上が小学校からの転入生となり、教科指導が必要となる。 令和7年度の教育課程Aは1年生を開設する予定だが、他学年は転入した時点で編成し直す。小学部職員の誰もが教科担任になりうる体制で対応する必要がある。毎年転入する児童増加を見込んだ職員配置ができないか。 - 令和7年度から校務支援システムの運用が本格的に始まる。個別の指導計画の様式が変更することに伴い、教科・領域を合わせた指導（日常生活の指導、生活単元学習）の各教科の目標を明確にする。 - 学校生活の中で転倒によるけがや服薬忘れ、持ち物の渡し忘れなどのアクシデントの報告が多く見られた。令和7年度から泊を伴う行事への看護師の同行や、気管切開のある児童への友愛プールの入水を控えている。児童が安心・安全に学習活動を進められるよう保護者や職員同士、関係機関との連携を図る。

学校関係者評価（令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等 - 学童期は、子どもの人格形成においてとても大切な時期である。ぜひ、子どもを受け入れ、子どもが認められていると自己肯定感がもてるよう、愛情をもって接してほしい。 - 地域としてできることとして、「学校だより」を回覧することで、近隣に学校のことをもっと知ってもらえるのではないかな。できることがあれば協力したい。

【中学部】

評価する領域・分野	「中学部」
現状及びアンケートの結果分析等	・直近3年間の学校評価アンケートより、教職員の専門性の向上については理解を得られたものの、学習課題設定やI C T機器を含む教材教具等の活用、次年度への引継ぎに対する部の取組みや体制については更に改善の余地があるとの反省を得た。 ・同上のアンケートにおいて、高等学校・高等部進学や将来の生活を見据えた支援及び情報提供が少ない、もしくは分からないという声があった。 ・生徒が心身ともに安全・安心な学校生活を過ごすことができるように留意してきたが、引継ぎの在り方や教職員間の情報共有、成長に伴う体調の変化への対応、心理面の不調への対応等が課題となった。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 生徒の課題と支援方法について根拠をもって設定し、取組状況を保護者や校内外関係者にわかりやすく発信する。 2 高等学校・高等部への進学や将来の社会生活につなげていくためのキャリア教育を推進する。 3 生徒が心身ともに安全・安心な学校生活を過ごすことができるように、校内の支援体制を基に組織的に対応する。必要に応じて、外部機関や専門家と連携して問題解決にあたる。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 部や学年会、授業づくりの日を活用した話し合いと情報共有。 コア・スクール研修、リハビリ参観、県や外部機関が主催する研修会等の活用と学びの共有。 2 進路指導主事、校内コーディネーターとの連携。 3 部、グループ内の情報共有及び管理職との連携。 総合支援部や校内コーディネーターとの連携、及び必要に応じて外部機関や専門家を含めたケース会議の招集。
目標の達成に必要な具体的取組	1 ・生徒の課題と支援方法について学習指導要領や専門家の助言等の根拠に基づいた効果的な学習を行い、教材教具やI C T活用等の具体的な手立て等も、校内外に授業の様子と共に、積極的に発信する。 ・年3回の個別懇談で、保護者に支援の意図や学習状況を丁寧に説明する。 ・コア・ティーチャーや専門家からの情報や助言を記録し、職員間で共有する。 2 ・高等学校進学を目指す生徒に対して、担任や進路指導主事を中心にスケジュールや情報提供を行い、教科担任のチームとして支援にあたる。 ・総合支援部による「キャリア教育だより」や校内掲示、高等部実習報告会等を話題にしながら、保護者への十分な情報提供や働き掛けをする。 3 ・身体に関するアクシデントや不調の兆候をつかんだ時に、「誰が」「どのように」「いつ」対応するのかを十分に理解したうえで、迅速かつ丁寧に対応する。 ・保健安全や教育相談に関わることにについては、組織的に対応できるよう「対応フロー図」の確認や迅速な報連相のための体制について確認する。 ・必要に応じて、外部機関や専門家との連携し、助言を得る。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 生徒の課題と支援方法について根拠をもって設定し、取組状況を保護者や校内外関係者にわかりやすく発信することができたか。 2 高等学校・高等部への進学や、将来の社会生活につなげていくためのキャリア教育を推進することができたか。 3 生徒が心身ともに安全・安心な学校生活を過ごすことができるように、組織的に対応することができたか。

取組状況・実践内容等	1 前年度までの取組みや外部専門家からの指導や助言等を、保護者や職員間で共有しながら学習指導を進め、登下校時の引継ぎや連絡帳、個別懇談等を通じて、時には写真や動画を用いながら学習状況を保護者に伝えた。 2 高等学校や高等部への進学に向け、教務部や進路指導主事と連携しながら本人、保護者への働き掛けや連絡調整、具体的な手続き等を進めた。 3 家庭からの引継ぎを基に、生徒の健康状態やその変化に気を配り、不調の兆しや違和感を覚えた際には管理職や看護師との連携のもとで速やかに保護者に情報共有した。
評価の視点	評 価
1 生徒の課題と支援方法について根拠をもって設定し、取組状況を保護者や校内外関係者に分かりやすく発信することができたか。	A ☒ B C D
2 高等学校・高等部への進学や将来の社会生活につなげていくためのキャリア教育を推進することができたか。	A ☒ B C D
3 生徒が心身ともに安全・安心な学校生活を過ごすことができるように、組織的に対応することができたか。	A ☒ B C D
成果・課題	総合評価
1 ○生徒の学習課題や支援方法について、リハビリ参観やコア・ティーチャーからの情報や助言を職員間で共有をしながら支援や授業づくりができた。 ○保護者に伝わりにくいICT活用状況について、日々の授業や行事、通信等で積極的に発信したことで、取組状況についての理解と評価が得られた。 ▲転出入に伴う体制変更や支援者の交代があった際、学年やグループを超えて支援にあたる職員にとって、学習課題や評価の観点が分かりにくかった。 ▲教科や指導形態によっては、2時間続きの授業時間枠を十分に生かしきれず、メリハリのある活動や展開を組むことが難しい面があった。 2 ○職場見学や体験と、生活単元学習、作業学習、総合学習等での取組をリンクさせながら、就労や社会生活につながる学習を計画的に行うことができた。 ▲生活年齢に応じた支援や学習について、保護者に伝えきれていない。 ▲日常的な身体や摂食等の支援や縦割り授業のよさを生かすことで、人とのかかわりや支援者を広げるための取組の工夫が必要であるとの意見があった。 3 ○生徒の健康状態の異変や違和感に気づき、保護者や看護師と素早く情報共有したことで、事態が重篤になる前に対応できたケースが多くあった。 ○アクシデントが起こった背景や要因をできる限り客観的な視点から分析して整理し、保護者と共有した。また、医師や療法士等の外部専門家を招いてケース会議を開き、より安全に学校生活を送るための視点や注意点の確認と周知を図った。 ▲宿泊学習で初めて発作を起こした生徒がいたため、対応に混乱が生じた。 ▲思い込みや不注意によるアクシデント、また、日常的な身体介助や支援の中での予期せぬアクシデント等があった。	A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 学習課題の明確化 ・学年やグループを超えて支援にあたる職員も含め、学習のねらいや必要な支援についての共通認識をもって指導できるような仕組みや体制を整える。 2 生活年齢を踏まえた生活・学習支援 ・中学部段階の生活年齢を踏まえた題材選びや働き掛け、また、支援者や生活経験を広げるための取組や体制について、キャリア支援の視点から見直し、授業づくりや支援に生かす。 3 安全・安心な学びを守る組織的な体制と対応 ・身体介助、摂食や水分摂取等、日常的に行う支援をより安全に実施するための確認や検証、専門家への相談、情報共有を行う。 ・校外活動や行事等における緊急対応についても検討し、安全に実施する。

学校関係者評価（令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等
・校外での活動中のアクシデントにおいては、十分な備えが必要である。特に、救急搬送が必要な場合、救急隊の知りたい情報が準備してあると、慌てずに対応できる。 ・子どもの病状については、日頃から関係機関と情報共有をしておく必要がある。

【高等部】

評価する領域・分野	「高等部」	
現状及びアンケートの結果分析等	・部集会等、生徒一人一人が活躍できる場を設定する。 ・保護者や本人のニーズを十分に聞き取り、適切な進路支援を行う。また、キャリア・パスポートを活用して、卒業後に必要な力を身に付けられるよう支援する。	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 生徒が安心・安全に学校生活を送れるよう、個々の実態と課題の把握に努め、生徒一人一人の豊かな心を育むための支援を行う。 2 学びに向かう姿勢を高め、自ら考えたり、自己の思いを周りの人々に伝えたりする力を育てるための支援を行う。 3 キャリア教育を通して自己の将来を考える機会をもち、自立や社会参加に向けた支援を行う。	
重点目標を達成するための校内組織体制	1 主任やチーフを中心として、学年会や類型会を定期的に行い、教師間で積極的に情報共有を行う。 2 生徒の実態や課題に応じた効果的なグループ編成や指導体制を確立する。 3 互いに授業を見合うなど、学び合う環境を整え、教育力の向上に努める。	
目標の達成に必要な具体的取組	1 職員間で情報共有を密に行い、効果的な教育実践を行う。 ・感染症対策を行いながら、教育的効果の得られる実践の工夫を行う。 ・生徒の実態や支援方法、安全面における引継ぎ事項を教員間で定期的に共有することで、安全かつ効果的な教育を実践する。 ・職員間で授業のねらいや実践内容、方法等について十分に検討、実践し、振り返る。振り返った内容を基にして次への実践へとつなげる。 ・身体的な支援を行う場合、身体が大きくなってきている生徒もあり、生徒が安全に学校生活を送れるように複数人で支援を行う。 ・部集会を定期的に行い、集団での役割や学びに向かう力等、生きていく上で必要となる自主性、社会性を育む。 2 キャリア教育の充実を図る。 ・キャリア・パスポートを年間計画の中にしっかりと位置付け、定期的にご利用し、自己の進路について考える機会をもつ。 ・本人や保護者の願いを丁寧に聞き取り、進路に関する必要な情報を積極的に発信し、懇談の機会を有効に活用して進路実現を目指す。	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	・安全な学校生活を保障し、個々の実態と課題の把握に努め、豊かな心を育むことができたか。 ・学びに向かう姿勢を高め、自ら考え、個々の方法で自己の思いを周りの人々に伝える力を向上させることができたか。 ・キャリア教育を通して、自己の将来について考える機会をもち、社会参加に向けた力を育むための支援をすることができたか。	
取組状況・実践内容等	1 個々の生徒の実態や健康状態、生活の様子等を複数の教員で情報共有し、支援した。 2 体験的な活動を通して、卒業後に必要な力を育む活動を仕組んだり、仲間と関わる場面を意図的に設定したりした。 3 キャリア実習報告会やキャリア・パスポートを活用することで、自身の進路について自ら考える機会を設けた。進路学習について、本人や保護者の願いを丁寧に聞きながら進めた。	
評価の視点		評価
1 個々の実態と課題の把握に努め、豊かな心を育むことにつなげることができたか。		☐ A ☐ B ☐ C ☐ D
2 生徒が自己の意思をかかわる人々に伝える力を向上させることができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D
3 キャリア教育を通して、生徒が自立するように支援できたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D

成果・課題	総合評価
1○部会や類型会、日常会話においても生徒についての情報共有を行い、生徒の心身の実態や状態を把握しながら、生徒が安全・安心に学校生活を送れるように努めた。 ▲担当とは異なる教育課程（以下、類型）の教員が生徒と関わる機会があるので、支援の方法や目標等をもう少し情報共有できるとよかった。共有の仕方の工夫や時間の設定などを行っていいけるとよい。 ▲類型の教員だけではトイレ介助等に人手が足りないときがあり、今後も類型以外の協力を得られるとよい。 ▲非常時を想定した時と同じ類型内に災害対策本部の人員が複数名いるのは避けた方がよい。 2○B類型において質問の仕方や会話の続く受け答えを、日頃から教師が手本を示すことで、一方通行ではない会話が生徒同士でできるようになった。C類型では合わせた指導における各教科のねらいを意識したり、国語や数学で身に付けた力を生活単元学習に結びつけたりして授業を構成することができた。D類型では活動内容やねらいに応じて、活動グループを分けて取り組み、個々の課題にせまることができた。 ○体験的な活動を多く取り入れ、課題を解決する力や他者とのかかわり方など、社会で必要な力を育む活動を仕組むことができた。 ○部集会やボッチャ大会等、年間を通してグループ分けを生かした取り組みをしたことで、他類型の生徒とのかかわりや仲間意識を育むことができた。 ▲定期考査に向かう意識が弱く、授業や家庭学習への取り組みにつなげられていない。 ▲合わせた教科のねらいを明確にして、教職員間で共有しながら授業を行う。 ▲他者に自分の思いを伝える力を高める。 3○キャリア・パスポートを活用し、行事の目標を具体的に設定したり、自分の進路と関連付けて振り返りをしたりすることができるようになってきた。 ○就業体験を実施する際、1年生からのつながりや積み重ねを確認したことで、前向きな姿勢を引き出すことができた。 ○集団での活動を設定したことで、仲間を意識して周りに目を向けたり、たくさんの人とかわわたりすることができ、卒業後を意識した取り組みになった。 ▲保護者の願いや生徒本人の願いを聞き、実態に応じた丁寧な説明や進路支援を行う必要がある。	A B C D
来年度に向けての改善方策案	1 教員間で情報共有を十分に行い、共通の視点をもって支援にあたる。個別の指導計画や支援計画、キャリア・パスポートを有効活用し、計画的な指導にあたる。 2 高等部集会を継続して行い、個々の生徒の活躍の場を設けたり、類型間の交流を図るような取り組みを充実させたりする。 3 生徒や保護者のニーズを丁寧に聞き取り、進路決定に向けて適切な進路支援を行う。そのために必要なねらいや目標を明らかにする。

学校関係者評価（令和7年2月3日実施）

意見・要望・評価等 ・地域交流として、作業製品を提供していただき、とても好評だった。今後も、ぜひお願いしたい。 ・将来、どう生きていくのかを在学中に考えておき、福祉や医療を活用したり、例えば「手をつなぐ育成会」等につながったりしておくとう安心である。
